

観光学科の日本語教育から見た 第2外国語の理想と現実

林長河

要　旨

海外の日本語教育は、学習者の多様化に伴い、学習動機も多様を呈している。その中で最も際立ったものは、「観光業務に携わるため」という目的である。台湾の日本語教育も例外ではない。観光面から言うと台湾にとって日本人観光客はいわば得意先である。その数は毎年、外国人観光客の一位を占め、今年1992年には100万人台を越える見込みだという。また、台湾から日本への観光客も1991年ではすでに65万人に達している。このような喜ばしい数字の後ろに、観光業に従事する日本語堪能な人材の不足という不安がある。今まで頗る時代に日本語教育を受けた人に多くを頼って観光業を発展させてきたが、その人たちも新旧交替せざるを得ない年齢になっている。だが、専門的な人材養成機関がないばかりでなく、頼りになる観光学科はカリキュラムと学習環境などの問題を抱えている。

本論はこれから観光業におけるリーダー格的存在は観光学科の学生が本命であるという前提にたって、観光学科の日本語教育をとらえ、需要と供給の観点から観光学科の日本語教育の問題点を検討し、改善意見を提出した。

【キーワード】大学の第2外国語、観光学科の日本語教育、需要と供給、現実と理想、問題点、改善策